

# 巻 頭 言

## 19年目のコミ福

コミュニティ福祉学会運営委員長

コミュニティ福祉学部学部長

三本松 政之

今年度はコミュニティ福祉学部が1998年に開設されてから19年目にあたります。コミ福は、人間福祉に関連する諸学を総合した、新たな福祉学の構築をめざして1998年に開設されました。学部名としてコミュニティ福祉を用いているのは、現在でも本学だけですが、この間にコミュニティ福祉学を学科名称としている大学が3大学、また専攻や系の名称として用いている大学もあります。全国で最初の、そしていまでも唯一のコミュニティ福祉学部がどのような意図のもとに出発をし、またこの間どのように変化を遂げてきたのかを振り返ってみたいと思います。

初代学部長の関正勝先生は最初の学部案内で、「新しいコミュニティ福祉学部は総合大学としての立教大学の伝統ある教育研究の歴史を活かして日本の、そして世界の福祉の課題に取り組む学部です」と述べています。別のところで『『地域』という言葉には、日本の場合、地縁、血縁という縁によって結ばれる閉鎖的なニュアンスもあるのではないかと思います。それに対し、『コミュニティ』というのは、人々があるひとつの課題や目標に取り組むことによってつくり上げていくもの、と考えています」と地域とコミュニティとの違いについて述べています（「新学部対談 コミュニティ福祉学部の開設に寄せて」）。先の学部案内のQ&Aのコーナーでは「なぜコミュニティ福祉学部というのですか。社会福祉学部とはどう違うのですか？」という問いが示され「福祉はもともと、社会的な弱者を援助するための施設ケアから出発しましたが、時代の進展のなかで福祉の担い手として、また福祉サービスの利用者としてあらゆる市民が福祉にかかわりをもつ状況になってきています。そして、より多くの人材や資源が福祉にかかわりをもち、社会が福祉的な機能を内在化させた新しい福祉社会を形成する方向性を明らかにし、身近な近隣から、グローバルな国際社会までの拡がりをもつコミュニティを基盤とした福祉を追求することを目標としてコミュニティ福祉学部を構想しました」と回答しています。コミ福が目指した方向性はこんにちにおいても必要とされていることであり、よりコミ福の存在価値は高まっていると言えるように思います。

2005年に「本邦初の『コミュニティ福祉学』を世に問う入門書」が岡田徹先生、高橋紘士先生を編者として作られました。「はじめに」にあたる部分を執筆された岡田先生は、「はじめに」とせず「『コミュニティ福祉学』宣言」とし、「コミュニティ福祉学では、人びとの共同性や協働をはばむ『社会的剥奪』(social deprivation) および『社会的排除』(social exclusion) からの自由が中心概念となる。……『いのちと存在』が織り成すコミュニティからの排除や、そこでの人の抛りどころや人権を剥奪することを、どう防ぐかということがコミュニティ福祉学にとっての根本的課題である」と述べています(『コミュニティ福祉学入門—地球の見地に立った人間福祉』有斐閣、2005)。

1学科体制からスタートしたコミ福は2006年に福祉学科とコミュニティ政策学科の2学科体制となり、さらに2008年にスポーツウエルネス学科が加わり3学科体制となっています。この3月に退職をされた坂田周一先生はご退職にあたって本誌に記されたメッセージで「コミュニティ福祉学入門」の授業が2016年度からの新カリキュラムでは学部共通の必修科目ではなくなったことにふれ「コミュニティ福祉学における諸学の統合の論理を掘り下げ共有するための、新たな仕組みづくりが課題」であると記されました。

グローバル化の中でテロや紛争が頻発し、貧富の差が拡大し、また災害の発生とその復興に関わる福祉課題などの生活に密着した数多くの課題が、他人事としてではなく、いまという時代を生きる私たち自身の問題として生じる状況下において、ウェルビーイング(よき人生、よき生活)を追求していくために、生活者の視点から多様な人々がコミュニティで関係づけられながら、新たなコミュニティを構築することの重要性はより高まっています。

かつて「変わらない理念が立教を変えていく」という標語がありましたが、コミ福の積み重ねてきた歴史のなかで、またこんにちという時代状況下において、コミュニティ福祉学部の変わらない理念はどのように継承され、その理念はコミ福をどのように変えていくのかについて、20年目を迎える前年の今、ぜひコミュニティ福祉学会のみなさんと考えて行きたいと思います。